

## 大人のつくる評価枠におさまる現代の子ども : ダンスドリルを事例として

著者	筒井 風薫
雑誌名	ノートルダム清心女子大学紀要. 外国語・外国文学編, 文化学編, 日本語・日本文学編 = Notre Dame Seishin University kiyo. Studies in foreign languages and literature. Studies in culture. Studies in Japanese language and literature
巻	45
号	1
ページ	97-116
発行年	2021
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1560/00000486/">http://id.nii.ac.jp/1560/00000486/</a>

# 大人をつくる評価枠におさまる現代の子ども

## —ダンスドリルを事例として—

筒井 風薫<sup>※</sup>

Children of Today Who are Forced to Live up to The Adults Expectations

Fuka TSUTSUI

This paper examines the situation of children in contemporary Japan. Specifically, we focus on the relationship between adults and children. And, we compare the relationship between adults and children at the period of high economic growth in Japan and the relationship between adults and children in contemporary Japan. We revealed that at the period of high economic growth in Japan, their relationship was “Hostile relationship” and today it is “Gift relationship”. “Hostile relationship” means that the influence of adult values on children was strong. On the other hand, “Gift relationship” means that the situation adults snuggle up to children.

Also, we focus on how children’s culture is born and find the differences in each era. The children’s culture in “Hostile relationship” era was born as a counter against adults. On the other hand, the children’s culture in “Gift relationship” era is what adults give to children.

We interview children who get involved “Dance drill”. Children’s the area of activities has expanded due to personalization education and they are looks like they can live comfortably more. But, actually, they are forced to settle themselves in adults expectations and they don’t feel good.

Keywords: Relationship between adults and children, children’s culture, “Dance Drill”

### 1. はじめに

近年、日本の子どもたちは、自身の将来に対する積極性を失いつつあるのではないだろうか。

NHK 放送文化研究所が 2012 年に行った「中学生と高校生の生活と意識調査」によると、「早く大人になりたいか」という質問に対し、「そう思わない」と答えた中学生・高校生が 52.5%と、半数を上回っている。大人になりたくない理由としては、1 位が「子どもでいるほうが楽」、2 位が「大人になってやっていける自信がない」、3 位が「なんとなく不安」

---

キーワード：大人と子どもの関係性，子ども文化，ダンスドリル

※ 本学文学研究科社会文化学専攻

であった。2位や3位には、「自信がない」、「不安」といったキーワードも見られる。大人になることを拒む子どもたちの姿は、自分自身の将来に対し消極的な態度をとっているように感じとることができる。

そこで筆者は、現代日本の子どもたちが将来に対する積極性を失っている原因は、大人と子どもの関係性の中から見つけ出すことができないだろうか、と考えた。現代日本社会において、大人と子どもが分離された空間や、学校に通う子どもの姿は絶対的なものに見える。しかし、歴史的に、子どもの在り様を追っていくと、必ずしもそうとは言えない。時代によって、多種多様な大人と子どもの姿を見ることができる (Ariès 1960=1980)。大人と子どもの関係性の変容に着目することで、子どもたちが消極的な態度をとっている一要因を解明したいというのが本稿の目的である。

本研究の手続きは以下の通りである。まず、日本社会における高度経済成長期から現代までの大人と子どもの関係性の変容を見ていく。高度経済成長期の日本社会は、技術革新と経済成長が著しく、現代の日本とは社会状況が大きく異なっている。社会状況が異なるということは、高度経済成長期における大人と子どもの関係性も、現代の日本社会のものとは大きく異なっていると考えられる。

続いて、大人と子どもの関係性をより具体的に指摘する事例として、高度経済成長期と現代のそれぞれの時代における子ども文化の生成の違いと、文化に関わる子どもたちの態度の違いに着目する。特に、高度経済成長期においては、子どもたちが能動的に文化との関わりをもっていた「竹の子族」を取り上げる。一方、現代社会においては、子どもたちが受動的に文化との関わりを持っている「ダンスドリル」を取り上げる。「ダンスドリル」に関わる子どもたちについては、聞き取り調査を行うことで、現代社会における大人と子どもの関係性の特徴をより具体的に示す。

なお本研究は、主に中学生・高校生を対象としており、彼らについての表記は、すべて「子ども」で統一する<sup>1)</sup>。

## 2. 大人と子どもの関係性の変容

### 2-1. 教育される「子ども」の誕生

本節では、大人と子どもの関係性の変遷をみていく。まず、本項では、アリエスの研究から、近代社会以後、「大人」と「子ども」の分離が生まれた経緯について見ていくこととする。アリエスは、絵画の変遷に着目し、17世紀までの中世芸術に子どもの姿が確認できないことを明らかにした (Ariès 1960=1980:35)。それ以前の時代の絵画には「子ども」としてではなく、大人の顔つきをした背丈の小さい大人が描かれているにすぎなかったという (Ariès 1960=1980:35)。このことは、「子ども」という概念が以前の社会にはなかったことを示している。

しかし、17世紀に入ると、上流階級の子どもたちは、大人と同じ服装を身にまとい、いないことを、アリエスは絵画の中から発見している (Ariès 1960=1980:51)。アリエスによると、「子供の服装を大人の服装からこのように区別させるこの慣行は、子供たちを特別扱いしようとする、ユニフォームによって子供たちを分離しようとする、中世には知られていなかった新しい気遣いを示している。」という (Ariès 1960=1980:55)。「子どもへの配慮」という新しい概念がここで登場したことがわかる。

また、同時期から、大人と子どもの遊びの共有も見られなくなる (Ariès 1960=1980:65)。さらに時を経ると、大人によって「悪い」と分類された遊びが子どもに禁止されるようになり、大人によって「良い」と認められた遊びのみが子どもに許されるようになる (Ariès 1960=1980:79)。このようなやり方で、大人たちは子どもの道徳性を保ち、「教育」をしようとするようになった (Ariès 1960=1980:79)。子どもに「学問」と「よき習俗」とを同時に与えるために、大人の社会から子どもたちを引き離す様式が誕生した (Ariès 1982=1992)。

以上のような経緯を経て、「大人」と「子ども」という区別は生まれた。そして、以前の時代においては気にかけていなかった「子ども」は、配慮される存在として扱われるようになっていった。

本節では、特に、高度経済成長期における大人と子どもの関係性と、現代社会における大人と子どもの関係性について取り上げる。以上述べてきたように、大人と子どもの関係性や、子ども観は普遍的なものではない。よって大人と子どもの関係性を明らかにするためには、それぞれの時代における社会状況や子ども観を見ていく必要があると考える。そのため、本節では、高度経済成長期と現代の社会状況や教育制度について取り上げたいうえで、それぞれの時代における大人と子どもの関係性を明らかにしていく。

## 2-2. 高度経済成長期における社会状況と教育

まずは、高度経済成長期の社会状況と教育についてまとめる。1950年代の日本は、技術革新と経済成長が著しい社会で、社会全体の風潮として、「人口能力の開発」が重視されていた。以上のような社会状況の中で、学校教育においても「能力主義」が主張されるようになる。

教育社会学者の長谷川裕介は、1980年代頃までの学校教育は、「子どもたちの態度や価値に対し、学校文化が与える影響が強かった時代」であるとし、この時代について「学校文化の時代」と名付けている (長谷川 2015:57)。

学校教育に限らず、技術革新と経済成長が著しかった当時の日本社会では、「能力主義」や「学歴主義」の傾向が強固であったといえよう。経済的な「成功者」になるために、技術開発に役立つ優れた能力を身につけること、高学歴を獲得すること、大企業に就職し安定した収入を得ることが重要であるとされた。そのような社会の中で、学校教育は、「成功者」の育成を目標として行われた。つまり、高度経済成長期の教育は、子どもたちが「成功者」になるための訓練を目的とした、画一的な価値のもとで行われており、みんなが、同じ目標に向かって、同じ道を同じ速度で歩くことが重要視された。幸せになるための方法は「経済的に成功すること」ひとつしかない、というのが高度経済成長期に生きる人々に社会全体で共有された価値観であったといえると考えられる。

しかしながら、以上のような画一的な教育のあり方は、結果的に「おちこぼれ」や「ヤンキー」、「ツッパリ」といった、当時の教育指針についていくことのできない子どもたちを生み出した (長谷川 2015:57)。日本の社会学者で、若者についての研究をする土井隆義は、当時の大人社会と子どもたちの関係について、以下のように述べている。

かつて、学校や家庭などの制度的な共同体の抑圧力が非常に強く、しかもそこに世代

間ギャップが歴然と存在していた時代には、その強い圧力に抵抗するために、少年たちは集団で徒党を組むことが多かった。大人社会からの圧力に連帯して立ち向かう必要に迫られていたから、その集団には強い結束力が備わっていた（土井 2012:68）。

大人社会の価値が、子どもたちに大きな圧力となっていた時代は、子どもたち同士の結束力は強く働いていた。では、どういった形で、子どもたちの結束が表れていたのだろうか。

### 2-3. 「おちこぼれ」たちによる校内暴力

1980年代の子どもたちを象徴する文化として「校内暴力」があげられる。校内暴力は、学校文化に適応することのできない「おちこぼれ」の子どもたちが中心的な担い手であった。

校内暴力について、当時の文部省は「学校生活に起因して起こった暴力行為をいい、対教師暴力、生徒間暴力、学校の施設・設備等の器物損害の三形態がある」という定義付けをしている。

警察庁は1973年から、校内暴力の発生件数に関して全国的な統計をとっている。これによると、校内暴力のうち対教師暴力は、統計を開始した1973年では、71件（中学校58件、高校13件）であったものが、10年後の1983年では843件（中学校835件、高校18件）とほぼ10倍強となった。また、補導人員も180人から1894人と約10倍となった。しかし、今日でも指摘されているように、当時は学校で生じた問題が学校内にとどめられ解決とされる場合が多く、すべての校内暴力について警察介入が行われていたかどうかは疑わしい。

これに対し、文部省の「校内暴力等に関する調査」は、各地の教育委員が把握したものを集計しているため、かなり実態に近い数字を出していると思われる。校内暴力について文部省の1982年のデータと警察庁の1983年のデータを比較したものを、表1に示した。文部省調べによると、1982年度では、657の公立中学で1404件、118の公立高校で159件、合計1563件の対教師暴力が発生している。これは、警察庁の調べに対して、約2倍の数である。

表1 校内暴力について文部省と警察庁の比較

	中学	高校	合計
1982年度（文部省調べ）	1404件（657校）	159件（118校）	1563件
1983年（警察庁調べ）	825件	18件	843件

出典 文部省初等中等局、「校内暴力に関する調査」、『文部時報』、昭和58年6月号、1983。

警察庁、『警察白書』、1983年度版。

このように、1980年代の校内暴力についてのデータを見ていくと、「学校文化の時代」において、子どもたちが大人からうける圧力が強かった一方で、子どもたちも大人に対して反抗的な姿勢を見せていたことがわかる。学校に適応することのできない「おちこぼれ」たちにとって、自らとは異なる価値を押し付けてくる学校の教師たちは大きな敵であった

といえよう。しかし、その子どもたちは、大人の価値観を黙って受け入れることはせず、「ヤンキー」や「ツッパリ」になることで、自らの主張を体現した。「学校文化の時代」における、「おちこぼれ」たちは、仲間同士の連結を強め、「敵」である大人への反抗を体現することによって、彼ら独自の文化を形成していった。

#### 2-4. 日本の社会状況の変化と個性化教育の誕生

前項でみてきたように、技術革新と経済発展の著しい高度経済成長期の社会では、人々の有能性や効率化が重視され、学校教育においても「能力主義」や「学歴主義」が主張されており、大人社会の価値観が子どもたちへ強固な圧力として働いていた。それは、結果として、学校教育に適応できない「おちこぼれ」たちが生まれる要因にもなっていた。

そのような状況の中で、1970年代頃から、近代的な教育のあり方を批判する声が上がりが始める。思想家のイヴァン・伊利イチは、近代産業社会が生み出した諸制度への批判を展開する。彼は、教育において、子どもたちは学校化によって自ら学ぶことを忘れつつあると批判した (Illich 1970=1977)。

知識を教師から生徒へ一方向的に教え込む教育のあり方への批判という、世界的な教育に対する価値観の変容の影響を受け、日本でも、1977年に小・中学校の学習指導要領の改訂が行われた。前回以前の方針とは大きく方針転換し、キーワードは「ゆとり」になった。

さらに1990年代に入ると、経済のグローバル化や、技術革新と情報化の急激な進展が起こる。このような国際的な社会状況の変化に対応するため、小・中・高校の学習指導要領の改訂が行われた。そこでは、第一に、「ゆとり」を実現するため、学校完全週五日制度を実施し教育内容を厳選すること、第二に、「個性を生かす教育」を推進するため、多様化と選択制を拡大すること、第三に、「生きる力」を育成するため「総合的な学習の時間」を新設することが、基本方針となった (八田 2009:199)。このような、学習指導要領の改訂の一連の流れは、まとめて「個性化教育」と呼ばれる。土井は、「個性化教育」の導入について、「それぞれの個性を伸ばして主体的に生きる力を育むべきだ」という新しい教育理念が学校教育に導入された、「高度経済成長期に重視されていた、「成功者」の育成教育よりも、『生きる力』『考える力』『個性の重視』などといった明確な基準のないものが教育目標として打ち出された」と述べている (土井 2008:38)。

また、土井は、「個性の在り方が教育の対象として真正面に捉えられるようになったのは、少なくとも物質的には豊かな社会が到来し、時代が工業化から次の段階へと移ったからである」、という (土井 2008:38)。また、このような社会の変化は、同時に社会の求める人材にも変化をもたらす。「個性化教育」が始まった時代の社会が求める人材は、画一的な大量生産を前提とした工場労働を担うような、均質的な人間ではなく、むしろ、多種多様な商品ニーズに応えうるような、創造性をもった人間が社会から求められるようになった。このことは、「すべての子どもの学力を一律に伸ばす」政策から、「できる子どもとできない子どもの能力の違いを認める」政策への転換を意味していた (土井 2008:39)。「個性化教育」の導入により、画一的な知識を詰め込む従来の教育から脱却し、子どもたちが自ら主体的に学び、考える教育へと転換するようになったのである。

「学校に適応できる子ども」と「学校に適応できない子ども」の違いが顕著に表れていた時代は終了し、方針上は、大人は「学校に適応できない子ども」たちに対しても、寄り

添いの姿勢を見せるようになっていった。

## 2-5. 現代日本社会における大人と子ども関係性の特徴

本項では、現代日本社会、つまり個性化教育誕生以後の日本社会における大人と子どもの関係性の特徴について着目していく。

NHK 放送文化研究所が2012年に行った『中学生・高校生の生活と意識調査』の親を対象にした調査によると、「どのような親でありたいか」という質問項目において、「何でも話し合える友だちのような親（父、54.2%。母、79.2%）」、「できるだけ子どもの自由を尊重する親（父、83.2%。母、79.3%）」、「子どもの言い分を聞いてやる親（父、83.1%。母、84.8%）」という現代の親の傾向が明らかになった。

また、教師と生徒の関係性においても、同様の事が起きているといえよう。1977年の学習指導要領の改訂により、子どもたちへの教育理念・内容が大きく変化したが、教育理念の変化は、教師の子どもへの関わり方にも大きな影響を与える。教育心理学者の河村茂雄が、行った調査によると、1998年から2006年の間に、小学校では、教師が生徒に友達感覚で接する「なれ合い型」学級が倍増して半数近くを占めているのに対して、教師が厳しく指導する「管理型」学級は半減している。一方、中学校では、「管理型」が依然として主流ではあるが、「なれ合い型」も倍近くに増加している（河村2007）。

現代社会の大人たちはかつてのように、子どもにとって大きく立ちはだかる壁のような存在ではない。さまざまな機会や可能性を提示し、子どもに寄り沿ってくれる存在に変化したのである。

## 2-6. 小括——「敵対関係」から「贈与関係」へ

本節の目的は、高度経済成長期から現代における社会状況の変化とそれに伴い変化した学校教育の方針を見ていくことで、大人と子どもの関係性がどのように変化したかを明らかにすることであった。

これまで見てきたように、高度経済成長期における人々にとって「成功」とは、良い学校に進学したのち、大企業に就職し、安定した収入を得ることであった。よって、子どもたちを「成功者」へ導くために、強固で画一的な価値のもと学校教育が行われていた。主に、好成績を修めること、先生の指示に忠実に従うことなどが、当時の学校教育の中で子どもたちに求められる重要な点であった。子どもたちにとって、学校教育が与える影響が強かったのは、学校教育によって訓練された子どもたちを、社会の側が強く欲していたとも言い換えることができよう。まさに、社会全体が「学校文化の時代」だったのである。

しかし、「学校文化の時代」は、すべての子どもたちにとってふさわしいものではなく、「学校文化の時代」の価値に適応できる子どもとできない子どもの二極構造を生み出した。自らの主張を捻じ曲げてくる大人社会は、適応できない子どもたちにとって、「敵」となった。適応できない子どもたちは、「敵」を打倒するため、彼らの間で連結を強め、校内暴力という形で、反抗の姿勢を見せた。本稿では、高度経済成長期における大人と子どもの関係性を「敵対関係」とする。

一方、情報化やグローバル化、サービス産業化など、高度経済成長期とは社会状況が変化した現代社会においては、以前の時代における「成功者」の価値が揺らぎ始める。その

代わり、多様な価値観を認めることが重要視され始めた。このことは学校教育においても、大きな影響を与える。子どもたちへさまざまな価値観や生き方を提示することで、それぞれに持っている個性を伸ばそうとする「個性化教育」が誕生した。個性化教育は、「できる子どもとできない子どもの能力の違いを認める」政策であるため、高度経済成長期にみられた、「おちこぼれ」たちと大人の「敵対関係」は自然と弱まってくる。また、「子どもにとって物わがりのよい大人でありたい」と願う親の姿や、「なれ合い型」教室が増加していることからわかるように、大人と子どもの関係性は「敵対関係」とはもはや言い表せない。個性化教育の時代における大人と子どもの関係性を、本稿では「贈与関係」とする。

### 3. 高度経済成長期と個性化教育の時代における子ども文化のありよう

#### 3-1. 子ども文化に関する先行研究のレビュー

近代以後、「子ども」という新しい概念の誕生とともに、子どもへの特別な配慮というものにとりわけ重要視されるようになる。子どもは大人とは異なった特性を持つものであるという考え方にに基づき、子どものための成育環境、子どものための食事、子どものための服装などといったものの必要性が説かれることとなった（小山 2002）。子ども文化も同様に、大人の共有する文化とは一線を画すものとして、注目されるようになる。

そして、当時の社会の子ども観や、社会構造を解明する材料として、これまでも数多くの子ども文化研究が行われてきた。

河原和枝は大正期に刊行された『赤い鳥』を分析し、子どもたちを純粹で無垢な存在だとみなす、当時の社会の子ども観を明らかにした（河原 1998）。

また、イギリスの文化社会学者のポール・ウィリスは自身の著作である「ハマータウンの〈野郎ども〉」で、フィールドワークを通じ、イギリスの中等学校の「野郎ども（おちこぼれ）」が共有する価値観と行動様式を明らかにした（Wills 1977=1985）。さらに、「野郎ども」の多くが労働者階級出身であること、そして「野郎ども」の形成する反抗文化が肉体労働者たちの共有する文化との親和性が高いことを指摘し、「野郎ども」が肉体労働者へと再生産される社会構造を解明した（Wills 1977=1985）。

このように、子ども文化は、当時の子ども観や社会構造の分析材料として用いられてきた。

本研究においても、高度経済成長期から現代までの、子どもと大人の関係性をより具体的に描写していくための事例として、それぞれの時代における子ども文化を取り上げ、それらの文化生成の違いと、文化内で見られる子どもたちの特徴の違いに着目する。

#### 3-2. 敵対関係の時代における子ども文化

本項では、1980年代の子ども文化を象徴する「竹の子族」について、文化研究やメディア論を専門とする原宏之の『バブル文化論〈ポスト戦としての一九八〇年代〉』（2006）を参考にし、当時の子ども文化の特徴について見ていく。

竹の子族は、小規模ではあるが、1979年から徐々に姿を見せ始めた。彼らは、ピンクや黄色のバステルカラーといった鮮やかな色合いの派手な衣装に身を包み、原宿の歩行者天国でラジカセを囲み踊った。多くの子どもたちにとっては、原宿のホコ天で踊ることやその衣装とダンスを観衆に見せることが目的だった（原 2006:42）。



1980年代の途中から、原宿には、ローラー族と呼ばれる集団も台頭してくる（原 2006:47）。ローラー族は、竹の子族とは異なる音楽、ダンス、衣装の集団であったが、両者とも『学校化社会』からの逃走」という点で一致していた（原 2006:48）。つまり、「学校文化の時代」によって生み出された、「おちこぼれ」たちによる集団である。

原は、70年代、80年代の子どもたちについて、「若者たちはすっかり馴致され、規律訓練され、管理される対象に変わってしまう。『学校化文化』の出現だ。学校化社会が近づくにしたがってそこから排除される者と、管理しようとする者との軋轢が広がるのは当然のことである。」と述べている（原 2006:60）。

以上のことから、竹の子族とローラー族は、「学校化社会」から排除された子どもたちが、能動的に集い、楽しみを見出す場となっていたことがわかる。

先述したとおり、学校文化の時代は、学校文化に適應できる子どもと、できない子どもの二極化を生み出した。学校に適應できない子どもたちは、自分たちを抑圧する教師や学校を「敵」とみなし、子どもたちの間で連結を強めた。「おちこぼれ」の子どもたちによる強固な連結が、竹の子族やローラー族といった、大人にとっては評価しがたい子ども独自の文化を生み出す要素となっていたということがわかる。

### 3-3. 贈与関係の時代における子ども文化

続いて本項では、贈与関係の時代、つまり個性化教育の誕生以後の時代における子ども文化の事例として、「ダンスドリル」を取り上げる。

今日、「ダンスドリル」<sup>2)</sup>と呼ばれる大会に向けて活動する中学校・高校のダンス部が急増している。ダンスドリルは、1930年にアメリカの西海岸で誕生した。当時のアメリカでは、高校生の多くが、飲酒・喫煙を日常的に行ったり、ドラッグに手を出したり暴走行為に加わったりする生徒も多く、その生活の乱れが大きな社会問題となっていた。そういった社会背景のもと、カリフォルニア州の公立高校において、荒れた高校生たちを更生させるプログラムとして、ダンスドリルが発案されたと言われている。

日本では、1980年代初頭に日本の舞踏家によって、1988年より、現在の組織での運営を開始し、2000年には非営利活動法人としての許可も受けた。今日では、高校の部活動の一環として発展している。ダンスドリルを主宰する団体であるNPO ミスダンスドリルチーム・インターナショナルジャパンのホームページ（以下、ダンスドリルHPとする）によると、「現在、夏に行われている当協会の『全国高等学校ダンスドリル選手権大会』は、スケールのにも内容的にも、もっとも充実した高校生の大会として評価され」ているという。もちろん、全国のすべてのダンス部が本大会に出場しているわけではないが、今やダンスドリルはダンス部の代名詞的存在であるといっても過言ではないだろう。ここ、岡山県内でも多くの高校がダンスドリルへ出場しており、アメリカで開催されるダンスドリルの世界大会へ出場を果たしている学校も多く見られる。

### 3-4. 小括——能動的に切り開いていく文化から大人によって与えられる文化へ

敵対関係の時代における子ども文化の生成の特徴には、「おちこぼれ」たちの大人に対する反抗心があった。また、「竹の子族」という子ども文化は、大人から用意された正規なルートではなく、「おちこぼれ」たちが、自らの主張を体現する場所として、能動的に

作り上げていた空間であることがわかる。大人社会からの強力な圧力が「おちこぼれ」たちを結束させ、文化を形成していたのである。

一方で、贈与関係の時代における子ども文化として取り上げた「ダンスドリル」は、大人によって子どもたちに与えられた踊りの場であるという特徴がある。日本におけるダンスドリルの普及期は、1990年代以後の個性化教育の導入という、子どもにさまざまな分野で活躍できる機会を与えようとする教育方針へと舵を切った時期とも重なる。子どもたちが、自分たちの活動領域を自身で切り開いていくのではなく、大人から与えてもらった空間内で、受動的に文化と関わっている。

#### 4. 現代社会の大人と子どもの関係性の実態

##### 4-1. 仮説の提示

本研究のねらいは、大人と子どもの関係性に注目することで、現代社会における子どもの特徴を明らかにすることである。

高度経済成長期の「竹の子族」が、「おちこぼれ」たちを中心に大人への反抗として生成されていったのに対し、現代社会における「ダンスドリル」は、大人の側から子どもたちへと用意されているという特徴がある。

このような文化の生成の違いは、現代社会における子どもと大人の関係性にどういった影響をもたらすだろうか。

筆者は、ここで、現代社会における子どもと大人の贈与関係が、新たな権力関係を発生させているのではないかとすることを仮説として提示しておく。具体的には、自らの主張を体現できる場を子どもたち自身で築きあげることが可能であった敵対関係の時代とは対照的に、贈与関係の時代、すなわち現代社会の子どもたちは、さまざまな活躍の機会を大人に提示してもらうがゆえに、自由に主張したり、つくりあげたりということがかえってしづらくなっているのではないだろうか。個性化教育では、とりわけ子どもの主体性といったことが強調されるが、贈与関係の中で、子どもたちの自主性は尊重されているのだろうか。

##### 4-2. ダンスドリルの実態—ダンスドリル HP より

本研究では、ダンスドリル HP からの情報や、ダンスドリルへの出場経験のある4名に聞き取りを行い、それらをデータとして用いることで、ダンスドリルに関わる子どもたちの実態を明らかにしていく。

ここでは、ダンスドリル HP から得られたデータをもとに、ダンスドリルの実態について明らかにしていく。ダンスドリル HP では、大会のルールブックも閲覧することができるため、そちらの情報も資料として用いる。

ダンスドリル HP「ダンスドリルの歴史」には、「全員がひとつの指示にあわせ、同じ動きを瞬時に行うという訓練を通し、生徒たちは集中力と忍耐力、さらに仲間を思いやる優しい気持ちと協調性を学ぶこととなりました。」とある。

ここからわかることは、ダンスドリルは、「全員がひとつの指示にあわせ、同じ動きを瞬時に行う訓練」である、ということである。そして、その訓練の到達目標として、生徒たちの「集中力」、「忍耐力」、「仲間を思いやる気持ち」、「協調性」が掲げられている。

ダンスドリルが誕生してから、人々の関心を集めるようになってくると、さまざまな場所で演技を求められるようになってくる。ダンスドリルの発案者である「ケイ・クロフォード女史はその頃から、厳しい約束事をドリルチームのメンバーに求めるようになっていったという。それらは、「品行方正」「容姿端麗」「成績優秀」であり、「学校内において他の生徒たちの模範となるような生徒でなければドリルチームのメンバーになることは許されなくなった」という。さらに、『品行方正・容姿端麗・成績優秀』な生徒たちは社会からも大きく評価され受け入れられ、ドリルチームのメンバーであることは、進学や就職の際大きく役立ち、生徒たちのその後の人生において大きなチャンスと幸運をもたらしていきました。ドリルチームで身につけたダンスのテクニックを生かし、ブロードウェイなどの、ショービジネスの世界で活躍をしたメンバーも少なくありません。」と記されている。

ここからは、ダンスドリルに出場するにあたって生徒は、「品行方正」、「容姿端麗」、「成績優秀」といった3つの条件を満たすことを求められていることが理解できる。また、当時、学校内の模範となる生徒像も、「品行方正」、「容姿端麗」、「成績優秀」であったことが読み取れる。そして、そういった3つの条件を満たす生徒は、学内だけでなく、社会からの評価も高く、進学や就職の際、ドリルチームのメンバーであったことが経歴として優位に働いている。

また、日本におけるドリルチームについては、「ダンスドリルは高校の部活動の一環として発展し、現在、夏に行われる当協会の『全国高等学校ダンスドリル選手権大会』は、スケールの的にも内容的にも、もっとも充実した高校生の大会として評価されています。ダンスドリルの基本理念はあくまでも教育活動の一環として、健全な青少年の心身の発展を目指す事です。」とある。

ここからは、ダンスドリルが、現在日本でも高い評価を受けていること、またダンスドリルは、「教育活動の一環」であり、「健全な青少年の心身の発展」を目標としていることがわかる。

ダンスドリル HP から見ることのできる 2020 年度の大会ルールブックの「2. Drill Team とは」には、演技の評価について、「演技においては、チーム独自の創造性、チームとしての協調性を通しての表現内容・技術・衣装・観客へのアピール、そしてチームとして充分満足できる演技ができた時に見せる表情などが評価対象として含まれます。」と記載がある。

ここからは、ダンスドリルで演技が評価されるためには、「チーム独自の創造性」、「チームとしての協調性を通しての表現内容・技術・衣装・観客へのアピール」、「チームとして充分満足できる演技ができた時に見せる表情」などが必要であることがわかる。「チーム」というキーワードが多くみられる点や、「協調性を通じて」という表現が見られる点から、ダンスドリルは集団としてまとまった演技を評価対象としていることがわかる。

以下の表2は、2020年度に行われるダンスドリルの年間スケジュールである。この表の、それぞれの大会の「対象」の項目をみると、多くの大会において、「中高」が対象となっている。クラブチームや、学外団体を示す「A」も対象となっている大会は、わずか4つの大会だけである。ダンスドリルは、ダンス活動に励む、すべての子どもたちに向けて開催されているわけではなく、部活動などの学校教育内でダンス活動に勤しむ子どもたちに

表2 2020年度のダンスドリルの大会スケジュール

名称	会場	開催日程	対象	
地区大会 (全国予選大会)	中国・四国大会	ジップアリーナ岡山 (岡山)	5月30日(土)	中高
	関西大会	丸善インテックアリーナ大阪 (大阪市中央体育館) (大阪)	5月31日(日)	中高
	東北大会	元気フィールド仙台 宮城野体育館 (宮城)	6月5日(金)	中高
	甲信越大会	長野運動公園総合体育館 (長野)	6月13日(土)	中高
	北海道大会	札幌国際大学 (北海道)	6月14日(日)	中高
	九州大会	かすやドーム (福岡)	6月14日(日)	中高
	関東大会	エスフォルタアリーナ八王子 (東京)	6月25日(木)-26日(金)	中高
	東海大会	天白スポーツセンター (愛知)	6月27日(土)-28日(日)	中高
全国中学校ダンスドリル選手権大会	丸善インテックアリーナ大阪 (大阪市中央体育館) (大阪)	7月31日(金)	中	
全国高等学校ダンスドリル選手権大会	丸善インテックアリーナ大阪 (大阪市中央体育館) (大阪)	7月31日(金)-8月2日(日) ※7/31は個人部門事前審査	高	
秋季大会	東北大会	元気フィールド仙台 宮城野体育館 (宮城)	11月2日(月)	中高
	甲信越大会	松本市総合体育館 (長野)	11月7日(土)	中高
	九州大会	かすやドーム (福岡)	11月7日(土)	中高
	中国・四国大会	善通寺市民体育館 (香川)	11月8日(日)	中高
	関西大会	エディオンアリーナ (大阪)	11月15日(日)	中高
	関東大会	駒沢オリンピック公園体育館 (東京)	11月21日(土)-22日(日)	中高
	東海大会	稲永スポーツセンター (愛知)	11月23日 (月祝)	中高
	北海道大会	VTR 審査		中高
Dance Drill All Japan Competition WEST	南海浪切ホール (大阪)	12月19日(土)	A	
Dance Drill All Japan Competition EAST	舞浜アンフィシアター (千葉)	12月25日(金)-27日(日)	A	
Dance Drill Winter Cup 全国中学校・高等学校ダンスドリル冬季大会	武蔵野の森総合スポーツプラザ (東京)	2021年1月9日(土)-10日(日)	中高	
Dance Drill Spring Festival WEST	丸善インテックアリーナ大阪 (大阪市中央体育館) (大阪)	2021年3月13日(土)	A 中高	
Dance Drill Spring Festival EAST	駒沢オリンピック公園体育館 (東京)	2021年3月27日(土)-3月28日(日)	A 中高	

中…中学校及びこれに準じる学校 高…高等学校及びこれに準じる学校 A…クラブチーム及び、すべての学外団体

(出典:ダンスドリル HP「2020年度年間スケジュール<sup>3)</sup>」より)

対して提示されている大会であることが読み取れる。

ダンスドリル HPの下部には、ダンスドリルのスポンサー会社の広告が掲載されている。ダンスドリルのスポンサーとして、「文部科学省」、「スポーツ省」、「朝日新聞」、「All Sports Community」(スポーツ写真)、「Pomche」(ポンポン、チアユニフォーム、チアグッズ販売)、「POCARI SWEAT」(飲料メーカー)があげられる。文部科学省やスポーツ省といった行政機関や、大手企業がダンスドリルのスポンサーについていることがわかる。

### 4-3. 聞き取り調査の概要

続いて、ダンスドリルへ出場経験のある4名に聞き取り調査を行い、ダンスドリルの実態を明らかにしていくこととする。聞き取りを行ったのは、S、K、N、Aの4名である。4人のダンス経験に関する基本的属性を表3にまとめた。

表3 聞き取りを行った4人のダンス(ダンスドリル)経験に関する基本属性

	所属	ダンス歴	中学時の ダンスドリル経験	高校時の ダンスドリル経験	学外での ダンス活動
S	高校生	11年	○(アメリカ大会出場)	○	○
K	高校生	11年	×	○	○
N	大学生	8年	○(アメリカ大会出場)	○	○(高校卒業後開始)
A	大学生	7年	○	○	○(高校の途中で一度辞めたが、卒業後復帰)

SとKは、県内の同高校に通っており、ダンス部に所属する現役生徒である。2人は、聞き取り調査を行った2週間前に岡山県で開催されたダンスドリルの中国・四国大会にも出場している。Sは、中学校のときもダンス部に所属しており、そこでもダンスドリルへの出場経験がある。また、アメリカで行われる世界大会への出場経験もある。

NとAは、数年前に高校を卒業した、元ダンス部生徒である。2人は、それぞれ違う高校でダンスドリルの大会やダンスドリルに向けた練習を経験している。そのため、同じ学校の生徒からの聞き取りだけでは把握できない、より網羅的なデータを聞き取ることが可能となる。また、NとAは中学校のときにも、ダンス部に所属しており、ダンスドリルへの出場経験がある。また、4名は全員、部活動以外でのダンス経験がある点で、共通している。

聞き取り調査は、SとKに対し同時に1回、NとAに対し同時に1回、計2回行った。それぞれ1時間30分程度である。場所は、県内のカフェやファミリーレストランで行った。当時のダンスドリルに関する思い出を語ってもらったり、現在ダンスドリルの大会や練習に関わる出来事を語ってもらったりする形で聞き取りを行った。

### 4-4. 調査結果

ここからは、聞き取り調査で得られた4人の語りをもとに、彼女らがダンスドリルに向けてどのような練習を行っていたか、また当時の彼女たちの気持ちはどういったものであったかを見ていくこととする。

#### 4-4-1. Sの語り

Sは、ダンスに対し非常に熱心な生徒で、ダンスの技術も高いため、部内では指導の中心人物になっている。彼女は、ダンスドリル大会へ向けた練習で、出場メンバーの動きを揃えるために、スマートフォンの動画撮影機能を用いることを教えてくれた。撮影した動画をスロー再生することで、手の細かい動きが揃っているかどうかを確認するという。ひとりでも他と異なる動きをしている人がいれば、何回でもやり直しをするという。ダンス

ドリルで結果を残すためには、演技中のメンバーの動きを徹底的に揃える必要があることがわかる。

SとKの所属するダンス部では、大会前になると、HIPHOP部門へ出場する選抜メンバーを決めるためのオーディションが行われている。しかし、ノヴェルティ部門<sup>4)</sup>の出場については、オーディションを行わず、部員全員の参加が強制されているという。部の担当顧問が、「部活動の活性化のため」に設けたルールである。そのため、ノヴェルティ部門の演技の練習に関しては、部内で温度差が生まれやすい。Sは、「やる気のない子もみんなで一緒になって大会にでよう」という教師の方針が理解できない。「やる気のない子たちに指導を行っても、心に届いていないのを感じる」ため、彼女は、部員全員を同じモチベーションに引き上げる指導を行うことに、やりにくさを感じている。この語りからは、ダンス部の担当顧問が、ダンスドリルに向けて、部員全員が同等に意識を高く持つことを期待されているということと、そういった方針がある一方で、実際に指導を行う立場であるSは、方針について快く思っていないことがわかる。

#### 4-4-2. Kの語り

Kは、ダンスドリルへ出場するための演技をつくっていく過程で、自分たちの考える「高校生らしさ」と、大人が考える「高校生らしさ」に大きなギャップがあると日々の練習の中で感じている。衣装を決める際に、大人にとって派手だと感じる服装が、子どもたちにとっては派手ではないと感じることがしばしばあるという。ここから、派手な服装は大人にとって「高校生らしく」ないとされていることや、自分たちの考える「高校生らしさ」と大人の考える「高校生らしさ」の間に乖離が生まれていることがわかる。また、ダンスドリルでは、「高校生らしい」演技が大人の側から求められていることや、派手な衣装は好ましいとされていないということも同時に読み取れる。

Kは、ダンスドリルに向けた練習は、「揃えることばかりに重点が置かれているため、みんなの個性を奪っていること」を懸念している。彼女は「ダンスドリル以外の大会があればそちらに出場したい」という。Sの語り同様に、ダンスドリルの練習においては、動きを揃える練習に時間を費やしていることがわかる。さらに、ダンスドリルの動きを揃えることに重点を置く練習が「みんなの個性を奪っていること」という。

Kは、部活動内で、一度だけ、ダンスドリルとは関係のないダンス作品をつくったことがあり、そのときの経験がとても楽しかったということを教えてくれた。自分の好きな音楽、振り付け、衣装で踊った経験を、とても楽しそうに語ってくれた。Kは、ダンスドリルとは関係のない作品の制作や発表は、とても楽しんだことがわかる。

#### 4-4-3. SとKの2人の語りから

SとKには、2人同時に聞き取り調査を行ったため、時折、ふたりで顔を見合わせたり、共通する返答をしたりといった場面も見受けられた。そのため、ここでは、2人の語りをまとめて見ていくこととする。

SとKに聞き取りを行ったのは、ダンスドリルの大会に出場した数週間後で、2人ともかなり疲れ切っている様子がうかがえた。「ダンスドリルの楽しいところ」について尋ねたが、2人は顔を見合わせるばかりで、「楽しいところ」が語られることは最後までなかつ

た。ここから、SとKは、ダンスドリルに向けた練習に一生懸命励んでいるが、内心は楽しんでいないわけではないことがうかがえた。

「ダンスの楽しさ」についても尋ねてみたが、答えはなかなか出なかった。踊ることが、彼女たちにとって「習慣化」しているという。

SとKは、ダンスドリルに向けた練習での「縛り」についての話題が上がった。彼女らは、自分たちが自由に作品を創作することができない大人からの「縛り」に不満を感じているが、自分たちが踊ることのできる場所や機会を大人から与えてもらっている以上、縛りに従うのは仕方がないという。また、「なぜダンスドリルへの出場をやめないのか？」という質問に対しては、「そういうものだから」という返答が得られた。

彼女たちは、ダンスドリルの練習に「縛り」があることによって楽しめなくなっているが、自分たちが踊ることができるのは場所や機会を与えてくれる大人がいるからで、その大人のつくる「縛り」に従うのは仕方がないという姿勢を見せている。また、ダンスドリルへの出場をやめない理由は、「そういうものだから」とし、ダンスドリルの出場について不満は持ちながらも、反抗して部活をやめたり、新たにルールを作り直したりしようとはしない様子がうかがえる。

#### 4-4-4. Nの語り

Nは、中学時代のダンスドリルの経験を振り返り、踊りのポジション決めをする際に、「学校の生活態度で先生に気に入られたら、いいポジションにしてもらえた」という。ダンスのポジションというのは、一般的にダンス技術の高い人が、前や真ん中といった目立つ位置に立つ場合が多い。よって、ポジション決めは、自分のダンスの技量を図るひとつの機会になっているといえる。しかしながら、Nの語りからは、ダンスドリルでは、「ダンスの技量」ではなく、「学校内での生活態度」が担当顧問にとって好ましいか好ましくないかという基準で行われる場合があるということがわかる。

また、Nは、ダンスドリルに向けた練習では「みんなが揃った動きをする」ために、「自分が感じたように踊ることは許されない」という。自分の個性を出すことはよいことと見なされないで、本人も個性を出して踊ろうとはしない。動きの基準になる人<sup>5)</sup>がひとり選ばれ、その人を基準に、腰の低さや上げる足の高さが均一になるように調節する。もちろん、身長や体格はみんな異なっているが、背の高い人も低い人も、同じになることが求められる。また、フォーメーションチェンジと呼ばれる、音楽に合わせて踊りながら行う移動も、みんなが全く同じスピード・動き方をすることが求められるという。このことから、ダンスドリルの大会へ向けた練習において、みんなが動きを揃える練習を重要としていることや、各々が個性を表現することを良しとしないことがわかる。また、個性を出すことはいい評価をもらえないため、子どもたち自身も評価をもらえる「個性をださない」という規範に身をゆだねている様子もうかがえる。

Nに、ダンスドリルの練習は楽しかったかどうかを尋ねると、彼女は「楽しくない」と語った。Nも、ダンスドリルの練習を楽しめていない。

#### 4-4-5. Aの語り

Aは、高校・大学受験の際に、「ダンスドリルで好成績を修めたこと」を自己PRとし

て利用したという。ダンスドリル HP にも、「ドリルチームのメンバーであることは、進学や就職の際大きく役に立つ」ということが記載されていたが、A の経験からも、同様のことがわかる。

また、A によると、ダンスドリルで使用する楽曲の審査が厳しいという。自分たちの使用したい楽曲が大人から、「学生らしくない」と見なされれば、作品の制作を開始する手前で外部コーチや顧問から、楽曲の使用を停止させられる。ダンスドリルにおいて、「学生らしく」ない楽曲は、審査の対象にすらならないということがわかる。

さらに彼女は、「高校生らしくない」と評価されなかった、他学校の作品が、どういった点で高校生らしくなかったのか、全く理解できなかったという。これは、K から語られたことであるが、大人の考える「学生らしさ」と子どもたちの考える「学生らしさ」に乖離が生じていることがうかがえる。

続いて、A は、全員の動きを揃える練習時に、先輩に怒られて更衣室で泣いた経験を話してくれた。何度やっても動きを揃えることができなかったことが、叱責を受ける原因だったという。さらに A の所属していたダンス部では、動きをみんなが揃えることができるように、難しい振り付けを取り入れることが禁止されていたという。あえて簡単な振り付けにし、みんなの動きを均一にすることに練習を費やした。ここでも、ダンスドリルの練習の中心がみんなの動きを揃えることであったことがわかる。難しい振り付けにチャレンジするよりも、簡単な振り付けで、動きを揃えることを大切にしていた。

また、ダンスドリルでは、演技中の表情も全員が揃える必要があるという。表情の決め方は、「あ、い、う、え、お」で行われる。「このときはあの口、このときはいの口で」などといったやり方で、全員の表情を統一していく。ダンスドリルでは、出場メンバー全員の演技中の表情までも、統一していることが求められていたことがわかる。

A は、ダンスドリルの練習を振り返り、「もうしたくない」という。A は、部活動での練習に専念するために、長年通っていた学外のダンスクラブを辞めた経歴があるが、高校を卒業し、ダンスドリルを引退した後は、ダンスドリルについて、「もうしたくない」という気持ちを持っていることがわかった。

#### 4-5. 分析と考察

調査から得られたデータに筆者の分析を加えると、調査からダンスドリルについて明らかになったことは、主に4つの知見に分けることができる。知見①は、学校教育とダンスドリルの関係性についてであり、知見②、③は、主にダンスドリルがどういった子どもたちを評価対象としているかを明らかにするものである。そして、知見④は、ダンスドリルと子どもたちの関わり合いの中で、彼女らがどのような態度を示しているかがわかるものである。それぞれの知見について、以下で詳しく述べていく。

##### 知見① 学校教育とダンスドリルの関係性

ダンスドリル HP に「ドリルチームのメンバーであることは、進学や就職の際大きく役に立ち、生徒たちのその後の人生において大きなチャンスと幸運をもたらしていただきました。」とあるように、A は、高校・大学受験の際に、ダンスドリルで好成績を修めたことを自己 PR として利用した経験を教えてくれた。



では、なぜダンスドリルで好成績を修めることが進学や就職に有利に働くのだろうか。

Nの経験から、ダンスドリルの踊りのポジション決めをする際、顧問に生活態度で気に入られるかどうかことが重要であるということがわかった。つまり、ダンスドリルで好成績を修めてきた生徒は、学校での生活態度も好ましいものであったと見なされる。そのため、進学や就職の際に有利となるのである。

また、ダンスドリル HP に、文部科学省といった学校教育に関わる行政機関が、ダンスドリルのスポンサーとして掲載していること、ダンスドリルの基本理念が、あくまで教育活動の一環として、健全な青少年の心身の発展を目指す事であると断言されている点など、ダンスドリルと学校教育が非常に密接な関係にあるということがうかがえる。

#### 知見② 大人からの評価に縛られる子どもたち—「学生らしさ」

ダンスドリルの大会では、子どもたちの振り付けや、使用する楽曲、衣装、メイクにおいて「学生らしさ」が求められていることが、彼女らの調査からわかった。「学生らしく」とないと言われる表現は、ダンスドリルでは評価を得ることができないため、子どもたちは仕方なく大人の意向をくみ取ろうとする。しかし、「学生らしい」ものは、明確な基準が用意されていないため、子どもたちは手探り状態である。ダンスドリルで見られる子どもたちのダンスは、大人をつくる「学生らしさ」の基準枠の中で表現されたものであるということができよう。さらに、子どもたち自身も、自分の使用したい楽曲を使用できないことについて、反抗したり、無視したりという態度をとるわけではなく、大人から評価を得るために、大人をつくる「学生らしさ」の枠の中におさまろうとしている。

#### 知見③ 大人からの評価に縛られる子どもたち—「協調性の重視」

ダンスドリル HP の「ダンスドリルの歴史」にも、「協調性」という言葉が登場したことや、「動きを揃えることに多く練習を費やした」といったことが4人から語られたように、ダンスドリルはとりわけ、「協調性」や「みんなで合わせることを重視していることが明らかになった。さらに彼女たちは、「動きを揃えること」や「表情を揃えること」などといった、物理的な協調性だけでなく、Sのノヴェルティ部門についての経験談からもわかるように、「みんなで同じモチベーションになる」といった精神的な協調性も大人から求められている。ダンスドリルにおいては、他の人と違う表現をすることや感情を抱くことは認められておらず、部員全員が演技も、やる気も基準となる人と同等までに並ぶことが必要とされる。子どもたち各々の個性よりも、まとまりとして整ったものが大人に評価される。

#### 知見④ ダンスドリルにおける子どもたちの態度

ダンスドリルが楽しい(楽しかった)かどうかについての問いに対し、4人全員から、「楽しくない」「もうしたくない」などといった否定的な意見が出た。

「踊ることが習慣化しており、楽しいところが答えられない」、「ダンスドリルへの出場はそういうもの(出場するということが部としてのルール)だからやめない」、「『縛り』に従うことは仕方ない」などといった語りや、「個性を出すことは評価をもらえないから個性をださない」、「自分たちが使用したい楽曲が認められなければ従う」などといった彼女らの振る舞いから、子どもたち自身は、大人からの評価の目に晒され続けることに対し、

嫌気を抱いているが、それに反抗したり、自分たちの新しい活動領域を作り出したりということはしていなかった。「仕方がないこと」として、現状を受け入れようとする彼女らの姿が見られた。

以上の分析によって、知見①ではダンスドリルが学校教育と密接な関係性にあること、知見②③では彼女らは大人から求められる「学生らしさ」や「協調性」などといった多くの「縛り」の中で活動に励んでいること、さらに知見④ではその「縛り」は彼女らにとって居心地の良いものでないということが明らかになった。彼女たちは「縛り」に対して、居心地の悪さや不満を覚えながらも、「縛り」を受け入れている。

## 5. 結論

### 5-1. ダンスドリルを楽しめない子どもたち

現代社会における大人と子どもの関係性の特徴として、「大人と子どもが贈与関係を取り結んだことで新たな権力関係が発生しているのではないか」ということを仮説として提示した。

SとKの、踊れる場所や機会を与えてもらっている以上「縛り」に従うことは仕方がないという語りは、まさに仮説を立証しているものであると言えよう。大人から踊りの場所や機会を提供され、それを受け入れた時点で、子どもは大人からの負債を抱えている状態となる。このことによって、大人と子どもの関係に権力関係が発生している。与える側と与えられる側に上下関係が生まれ、与える大人の支配に対して、与えられる子どもは服従を余儀なくされるのである。大人から与えてもらっている空間や機会を利用するにあたって、子どもたちは、たとえ、そこでやり方やルールに対し不満を抱いたとしても、与えてもらっている以上、反抗するのではなく、その状況を黙って受け入れるしかないという状況に追い込まれているように見える。

これは、高度経済成長期に見られた敵対関係の時代における「竹の子族」の子どもたちとは、対照的である。竹の子族は、学校文化に適應することのできない子どもたちの象徴であった。彼らは、学校の「縛り」には適應できない一方で、学校以外の独自の活動領域を能動的につくりだした。そして、「踊る」という表現活動を通じて学校では得ることのできない価値を自ら見出し輝いていた。一方、現代社会のダンスドリルで子どもたちが活躍するには、学校文化に適應できることが必須条件となっている。ダンスが学校教育に取り込まれたことで、子どもたちは、さまざまな活躍の場を選択できるようになり、自由を手に入れたように見える。しかし、実際は自由な表現活動は許されておらず、大人のつくる場所で大人のつくる評価枠内での表現にとどまっている。

また、ダンスドリルの出場をやめたり、他のことに取り組んでみたりしない彼女たちを見ていると、自らの力で「楽しい」を生み出すこと、そのものが、彼女たちにとって、とても困難なことであるように感じた。

### 5-2. まとめにかえて

本研究は、現代社会の子どもたちが消極的な態度をとっている原因を、大人と子どもの関係性に着目することで、明らかにしていくことが目的であった。まず、日本社会における高度経済成長期から現代の社会状況の変容とともに、大人と子どもの関係性がどのよう

に変化したかということについて論じた。続いて、高度経済成長期と個性化教育の時代、それぞれの時代における子ども文化の生成の違いや、それに関わる子どもたちの態度の違いについて論じ、現代社会のダンスドリルを事例として取り上げ、それに関わる子どもたちにインタビュー調査を行うことで、子どもたちの実情を明らかにした。

高度経済成長期には、「経済的に成功することこそが幸せ」という価値観が日本社会全体で共有されており、学校教育においても、画一的な価値観のもと、一方的な教育が行われていた。「校内暴力」や「竹の子族」などといった子ども文化の生成の特徴や子どもたちの態度から、大人と「おちこぼれ」の子どもたちに「敵対関係」が取り結ばれている様相をみる事ができた。その後、日本社会の経済の停滞、グローバル化や情報化などといった社会状況の変化により、学校教育のあり方も子どもに対して多様な価値を認める「個性化教育」の方針がとられるようになった。個性化教育による大人たちの子どもたちへの寄り添いの姿勢は、大人と子どもの関係性を「贈与関係」へと変化させた。それによって、以前の時代では、「おちこぼれ」たちが大人社会への反抗を体现する場として機能していた踊りの場は、現代では大人から子どもへ与えられるものへと変わった。その結果、子どもたちは大人からの負債を抱えている状態へと陥り、大人からの「縛り」に不満や違和感を抱えているにもかかわらず、反抗したり、距離をとったりすることが困難になったのである。

画一的な価値を押し付けるというような学校教育から、個性化教育の導入という学校教育における指針の転換や、「敵対関係」から「贈与関係」へという大人と子どもの関係性の変化は、子どもたちは大人からの自由を獲得し、以前の社会よりものびのびと生きることのできる社会に変化したように見える。しかしながら、ダンスドリルに関わる子どもたちの語りや経験を通じて、浮かび上がった彼女たちの姿は、決して自由でのびのびとしていたとはいえない。

はじめに述べたように、現代日本の子どもたちは、自身の将来に対して不安感を抱いたり、消極的な態度をとったりという傾向が見られる。このことを踏まえると、「個性化教育」の導入、つまり、子どもたちの自由の拡大が、将来への喜びや各人の個性の爆発と直結しているとは、言い難い。

社会心理学者エーリヒ・フロムは自身の著書である『自由からの逃走』で、近代化によって人々は自由を得たが、孤独や不安が増し、世界における自分の役割や人生の意味に対する疑惑が高まり、個人としての無力さと無意味さの感情をつのらせたことを指摘している (Fromm 1941=1951)。中世社会では、個人的な自由は欠落していたが、それは社会的秩序の中で、自分の役割へつながれており、人生に対して不安を覚える必要がなかった。一方、現代では、自分の役割を自分自身で見つけ出さなければならなくなる。そして、その答えは、決まった正解があるわけではないが、なんでも許されるというわけでもない。「新しい自由は必然的に、動揺、無力、懐疑、孤独、不安の感情を生み出す」のである (Fromm 1941=1951:67)。

これと同様のことが、現代日本社会における子どもたちの身にも起きているといえるのではないだろうか。個性化教育の導入によって、子どもたちは以前の社会よりも確かに自由を得た。多様な道が子どもたちへ提示され、子どもたちはさまざまな場面で多くの選択ができるようになった。しかしながら、子どもたちは主体的に道を切り開いていくことは

せず、大人をつくる空間に受動的におさまり、その空間での「縛り」を仕方なくも受け入れることで、かえって自らの安心感や存在感を保とうとしているようにも見える。

本稿では、「踊り」という視点から「竹の子族」と「ダンスドリル」についての比較によって、現代社会に生きる子どもたちの様相について追ったが、これはあくまで一例である。子ども文化といっても多くの媒体があり、さまざまなものが事例として取り上げることが可能であるといえよう。今後の課題としては、より広範囲に渡った事例の考察が必要である。また、大人がなぜ「学生らしさ」や「協調性」などといったことを子どもへ求めるのかという、現代日本社会における大人側のもつ子ども観については深く触れることができなかった。こちらも今後の研究の課題としたい。

## 注

- 1) 「子ども」という言葉の示す意味は、場面によって異なり、極めて定義しにくい。内閣府の『子供・若者白書』を見ても、問題に応じて取り扱う子どもの年齢幅は多様である。よって、今回の研究においても、子どもという言葉を用いることに慎重になる必要があると考える。しかし、本研究では、主に学校教育内に見られる大人と子どもの関係性に着目することを目的としているため、「子ども」という言葉の使用について、このように定義しておく。
- 2) ダンスドリルは、大会の中でも様々なカテゴリーがあり、リリカル、HIPHOP、POMなど合計で15カテゴリーに分かれている。こういった点も、ダンスドリルの魅力として評価を受けている。子どもたちは、各々好きな表現方法を選択し出場することが可能である。
- 3) ホームページに記載された表から、名称、会場、開催日程、対象の欄のみを再掲している。
- 4) 観客に分かりやすいキャラクターに扮し、ダンスを用いて物語を表現していくカテゴリー（NPO ミスダンスドリルチーム・インターナショナル・ジャパン「カテゴリー紹介」より）
- 5) ダンス技術の高い人が選ばれるが、技術が高すぎても全員がその人に合わせることはできないため、程よく技術が高い人が選ばれるという。

## 参考文献

- Illich Ivan,1970, “*The Deschooling Society*” (= 東洋・小澤周三訳、1977、『脱学校の社会』、東京創元社。)
- 小山静子、2002、『子どもたちの近代 学校教育と家庭教育』、吉川弘文館。
- Fromm Erich,1941, “*Escape from Freedom*”, U.S.A (= 日高六郎訳、1951、『自由からの逃走』、東京創元社。)
- 河原和枝、1998、『子ども観の近代—『赤い鳥』と「童心」の理想』、中公新書。
- 河村茂雄、2007、『データが語る〈1〉学校の課題』、図書文化。
- 警察庁、『警察白書』、(1973、1983年度版)。
- 八田幸恵、2009「XⅢ 学習指導要領の変遷 7 1998(平成10)年度版学習指導要領：生きる力・総合的な学習の時間」、田中耕治編、『やわらかアカデミニズム・〈わかる〉

- シリーズ よくわかる教育課程』、ミネルヴァ書房。
- 土井隆義、2008、『友だち地獄—「空気を読む」世代のサバイバル』、ちくま新書。
- 、2012、『若者の気分 少年犯罪〈減少〉のパラドクス』、岩波書店。
- 内閣府、『子供・若者白書』、(2010～2020年)。
- 長谷川祐介、2015、「第5章 教室の中の子どもたち—学級・学校における人間関係の変容」、南本長穂・山田浩之編、『入門・子ども社会学 子どもと社会・子どもと文化』、255-67。
- 原博之、2006、『バブル文化論 〈ポスト戦後〉としての一九八〇年代』、慶應義塾大学出版会。
- Ariès Philippe, 1960, “*L’enfant et la vie Familiale sous l’ancien régime*”, Éditions du Seuris, Paris (= 1980、杉山光信・杉山恵美子共訳、『〈子供〉の誕生 アンシャンレジーム期の子供と家族生活』、みすず書房)。
- , 1982, “*l’Histoire des Mentalités*”, Editions Retz. 1972, “*Problemes de l’Education*”, Editions, Gallimard (= 1992、中内敏夫・森田伸子編訳、『「教育」の誕生』、藤原書店)。
- Willis Paul, 1977, “*LEARNING TO LABOUR How working class kids get working class jobs*”, UK (=1985、熊沢誠・山田潤共訳、『ハマータウンの野郎ども 学校への反抗 労働への順応』、筑摩書房)。
- 文部省初等中等局、「校内暴力に関する調査」、『文部時報』、昭和58年6月号、1983。

#### 参考サイト

- NHK 放送文化研究所、「中学生・高校生の生活と意識調査2012」、<https://www.nhk.or.jp/bunken/summary/yoron/social/pdf/121228.pdf> (最終閲覧日：2020年1月6日)
- 統計数理研究所、「日本人の国民性調査」、<https://www.ism.ac.jp/kokuminsei/> (最終閲覧日：2020年1月6日)
- NPO ミスダンスドリルチーム・インターナショナルジャパンホームページ <https://www.dancedrilljapan.com/> (最終閲覧日：2020年9月24日)